



学校法人
鎌倉女子大学

「道理の感覚」を育てる教育

二冊の本を読みました。その二冊を読むことになったのは、全く偶然のことです。わが家の食堂のサイドテーブルの上に乱雑に積み重ねられている本の中で、息子でも買ったのか、たまたまこの二冊が半分ばかり顔を出していたので、何となく手にとったというだけに過ぎません。一つは、藤原正彦さんという数学者の書いた『国家の品格』という本です。もう一つは、茂木健一郎さんという科学者が書いた『脳と仮想』という本です。近頃評判になった本だけに、題名は、知っていたものですから、ならば読んでみようか、そう思って、ページをめくり始めたわけです。

この二つは、全く種類の異なる本なのですが、しかしある種の共通項があることにすぐに気づきました。著者のお二人共、数学や科学を勉強してきた、俗に理系の方にも拘わらず、しかし共に、しきりに世の中は論理だけで成り立っているわけではないのだ、思考は合理だけで構成されているわけではないのだということを強調なさっているのです。無論、その議論の前提には、お二人が長らく勉強もし、尊重もしてきたであろう論理や合理ということの重要性を十分にわきまえた上のことではあるのですが。

藤原さんは、こういっています。論理だけでは世界は破綻する、論理的に正しいことはさほどのことではない、むしろその人の身体に刷り込まれている情緒というものの方が、人間や世界にとってははるかに大切なことなのだ。何故なら、論理には出発点が必要で、その出発点は、常に仮説であり、仮説を選び採るのは、論理的帰結からではなく、煎じ詰めれば、それを選び採る人の所詮は情緒に依存しているものだからです。ですから、邪悪な情緒に染まった人が選びとった仮説から論理的推論を重ねて、「邪悪は正義である」という客観的結論を導き出すことは、多少の論証力のある者なら、そう難しいことではないのです。その手の論理をもてあそぶ弁護士等は、しばしば見聞きするではありませんか。

他方、茂木さんは、如何にも脳科学者らしく、あらためて「感覚質」等という言葉に着目して、こういうことを強調しています。深い悲しみを通り越した時、その向こうに見えるもの、小さな歓びに没入した時、自らを包み込むもの、そのようなものが、自分の意識によって確かにとらえられているように感じられる、ニュートン以来の物理学のように、論理を構築して、機械仕掛けの世界を引き受けるのではなく、感じる^{クオリア}ことによって世界を引き受ける、そういう道筋があるように思えるのだと。

現代に生きる私たちは、論理的・合理的言葉を聞かされ続けています。ライブ○○とか××ファンドとか、こういった人士は、こう公言してはばかりませんでした。「お金儲けして何が悪いのですか」、「皆さんだってお金好きでしょう」、「商法に則ってやって何で非難されなければならないのですか」、「私が儲けすぎたからいけないのですか」。確かに、いわ

れてみれば、一つ一つの言葉には論理性もあれば、合理性もあります。貨幣それ自体が自立的な価値をもつ経済社会にあって、貨幣それ自体を目的にして生きて何が悪い、そうやって倦むことない彼等の言葉に、一応道理に反したところはないようにも思えます。ニューロンベルクのマイスタージンガーは、「金^{かね}は地上の神」と奔放に詠いましたが、現代のハンス・ザックスたちは、はるかに周到な論理を用意して、自分たちの振舞いの合理性を声高に謳いあげます。

しかし、こういう言葉を耳にすると、私たちの心には、やはりどこか変だな、どこか違うなと感じるものがあります。藤原さんは、その感覚こそ、人間が真っ当に生き、世界が真っ当に成り立っていくためには大事なのですよとっているのです。茂木さんも、思考というものは合理的経験だけで成り立っているのではなく、感覚的経験こそが思考にリアリティーを与えている、その感覚というものを包み込まない思考というものは、実に底の浅いものなのですよとっているのです。

そこで、私は、かつてカント学者として一世を風靡し、吉田内閣の文部大臣を務めたこともある天野貞祐先生が、「道理の感覚」といったことを思い浮かべました。

道理の感覚、なかなか含蓄に富んだ言葉のように思います。ただ、この言葉は、理屈っぽく説明すれば、多少矛盾を含んでいるところがあるのです。普通、道理を判断するのは、理知であり、感覚ではありません。普通、感覚は、好き嫌いを判断する能力です。ですから、まともに議論すると、曖昧模糊とした好き嫌い等に拘泥するものと蔑^{きげす}まれ、感覚派は、大抵道理派に負けるのです。

しかし、道理を理屈としてではない、感覚として受け止めるというところに、天野先生の言葉の意図の妙味があるのです。一々理由を挙げなくても、正しいことをステキダナと感じる感覚、一々説明を受けなくても、間違っていることをイヤダナと感じる感覚、つまり道理を感じ取る感覚、昔の人がそれこそを「心」といったものなのですが、その素直な感覚を養うことがとても尊いように思われます。

多少荒っぽくいえば、論理や合理等というものは、大人になってからでも、特訓して、教え込むことが出来るものです。しかし、感覚は、幼い頃から長い時間をかけて次第次第に培う他ないものです。その母親の言葉遣い、他人への接し方、その母親が何に笑顔を向け、何に悲しげな顔を表すのか、その父親が何を正しいとし、何を遠ざけようとするのか、その家庭が何に重きをおいて生活し、その学校が何に重きをおいて教育しているのか、意図的な教育も元より大切なことですが、無言のうちにも道理の感覚が培われる教育的雰囲気の中で子どもたちが育まれることが、子ども自身の将来にとっても、私たちの社会の行く末にとっても、大変重要なことのように思えます。「道理の感覚 (right feeling)」を育てる教育、そんな教育が今日しきりに求められているように思えてなりません。

[>前のページへ戻る](#)